
【短編】夏色の調べ

柊 六花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【短編】夏色の調べ

【Nコード】

N2347Y

【作者名】

柊 六花

【あらすじ】

高校二年生の夏彦は、ピアニストになれなかった母親の夢を背負わされ、日々ピアノを弾くことを強いられていた。そんなある日、ピアノの練習を終えた夏彦がふと窓際に目をやると、窓台の上に一輪の花が置かれていた。誰かが置いたのだろうかと窓の外を覗き見るが、誰の姿もない。このちょっとした出来事は、ピアノを弾くことへの鬱々した気持ちを和らげてくれる

1・窓辺の花

蝉時雨に重なる、ピアノの旋律

じつとりとした夏の暑ささえ忘れさせる、そのやわらかな音色は、
厳しい女性の声とともにぴたりと途切れた。

「夏彦^{なつひこ}、何度言ったら分かるの！そこはそうじゃないでしょ？
それに、また左手がおろそかになっているわ。もう一回、最初から
弾いてちょうだい」

はあ、と夏彦は母に悟られないように、小さく溜息をついた。

こんな厳しいことを言われながら、どうして好きでもないピアノ
を弾かなければならないのか。

それでも

「夏彦？聞いているの？」

「……はい」

湧き上がる感情をぐっと堪え、夏彦は鍵盤に指を戻した。

母の厳しいレッスンを終えた夏彦は、身を投げ出すようにしてだ
らりとソファーに寝転がっていた。ピアノに向かっていた時の重苦
しさが、まだもやもやと心の中に残っているけれど、母が買物に
行っている今は、少しだけ息をつくことが出来る。

ふんわりと窓辺のカーテンがふくらみ、生温かい風が頬を撫でて
いく。風の道筋を辿るように、何気ない気持ちでふと窓際に目をや
った。

(……？)

ちらちらと何かが揺れている。

夏彦はゆっくりと身を起こし、窓辺に近づいた。

開け放たれた窓は出窓になっているので、手前は簡単なものなら

置ける程度のスペースがある。煩雑になるのを嫌う母親の意向で何もない筈の場所に、それはあった。

吹き込む風に身を揺らす、一輪の黄色い花

夏彦はそつと手に取り、目を瞬かせた。

「何でこんなところに……？」

誰かが置いたのだろうか。そう思っただけで窓の外を覗き見るが、誰もいない。

（鳥が啜くわえてきて、置いた……とか？）

目の高さまで持ち上げて、意味もなく角度を変えてみる。

（それも風？）

そう思った時。

ひととき強い風が吹き込んできて、夏彦の手から花を攫おうとする。

（あつ……！）

手放してはいけないような気がして、夏彦は茎の部分を強く指先で掴んだ。

悪戯に吹いた風はすぐに止み、変わらず手の中にある花を見て、夏彦はほつと胸を撫で下ろす。暑気の気たるさも、ピアノを弾いていた時の息苦しさも消えていた。

花を手にしたままリビングを後にし、二階にある自分の部屋へ向かって、階段を駆け上がっていく。

こんなことで浮かれた気持ちになるなんて。

でも、ちよつとした変化が何だか嬉しかった。

手すり越しに階下が見下ろせる吹き抜けの廊下を渡り、夏彦は一番奥にある自室の扉を開いた。

空色のカバーのかかったベッド。カバーとおそろいのカーテンを両端に寄せた窓、その下に設えられた机、本棚、クローゼット。

机の前の回転椅子に腰を下ろし、手にしていた花を机の木目に添わせ、眺める。

（何の花だろう？）

その辺に咲いている野花のようにも見え、庭で丹精に育てられているような花にも見える。草花の知識などまるでない夏彦は、すぐに諦めた。

ん……と、伸びをする自分の姿が、机に面した窓に映っている。その奥に透けて見える夏の空は、まだまだ明るい。

(このままじゃ、枯れちゃうよな。 あ、そっか)

本棚の中から分厚目の辞典を引き出してきて、真ん中辺りを開く。二つ折りのティッシュペーパーに挟み込んだ花を、開いたページの上に乗せて、位置がずれないように気を付けながら、そろそろと閉じる。

(これでよし……と)

ミンミンと鳴く蝉の声を聞いていたら、ふと思い出したのだ。

亡くなった田舎の祖母が、よくこうして押し花をつくっていて、遊びに行くとき必ず見せてくれた。透明なプラスチックの板に挟んだそれは、しおりだったり、キーホルダーだったり。使われる花も、赤に黄色にオレンジに。

どうしてこんな風にするの？ と無邪気に訊くと、しわくちなな顔をいつそうしわくちなにして答えてくれた。

これは時間を止める魔法だよ、と。

閉じた辞典の上をそっと指でなぞりながら、夏彦は祖母のしわがれた声を思い出した。

「制服って、何でこう暑いんだろう……」

ベッドの上にかばんを投げ出し、夏彦はひとりごちた。

中学に入って初めて着た制服は、高校二年になった今でも好きになれない。

さっさと私服に着替えて幾分か暑さを和らげ、リビングへと降りる。

「ない……か」

窓辺に目をやり、小さく溜息をつく。

ソファーに腰を下ろし、背もたれに体重を全部あずけて、ぼんやりと室内を見渡した。

田舎の法事で両親ともに家を空けているから、家の中はがらんとしている。元々それなりに広いリビングの中が余計に広々と見え、一人なんだな……と思う。

どうしても目に入る黒塗りの大きなピアノに目をとめ、苦々しい気持ちになる。母がいないのをいいことに、ピアノの練習は三日もさぼっていた。

(どうせ、明日には帰ってくるんだ……)

そうしたら、嫌というほど弾かされる。

叶えられなかった夢を息子にたくす。よくある話だ。

これは祖母に聞いた話だが、母は幾つかのコンクールで優勝したこともあったらしい。

はあ……と重々しく溜息を落とし、殺伐とした気持ちで特に何をすることもなく余暇を過ごす。

そして、どれくらいたった頃だろうか。

ふと思立ったように、夏彦はピアノの前に座った。

ミン、ミン、ミン。

嫌い、嫌い、嫌い。

蝉の鳴き声と、心の中に響いた声が、嫌な具合に重なった。

カタンと蓋を上げて、夏彦は楽譜も開かず鍵盤の上に指を下ろす。

鬱屈した心、そのままの音が指先から零れていく。

嫌いで嫌いでやめたいと思っているのに、いざ離れてみると、ふと弾きたい気持ちに駆られてしまい、技巧や理屈も何もかも捨てて、夏彦は思っままに指を滑らせた。

何も考えないで心を音にしていると、次第に気持ちがるになる。

鬱々としていた曲調がやわらかくなり、跳ねて、軽快なリズムへ

と変わっていく。

そして、最後の余韻を残して鍵盤から指を離した頃には、黄昏時の陽が部屋をオレンジ色に染め上げていた。

(結局弾いてるし)

苦笑し、あの日と同じように、何気なく窓辺に目をやった。

(あつ……)

夏彦の目が見開かれる。

ピアノ椅子から下りて窓辺に駆け寄った。

「あつた……」

あの時と同じように、一輪の花が風に吹かれて揺れている。

黄色い花ではなく、今度は紅い花だ。

拾い上げようとしたその時、窓の外をさっと影が過ぎった。

慌てて窓の外を覗き見る。

そして見つけた。黄色い背中を

後ろで結ばれた白いリボンが、ひらひらと蝶のように舞いながら離れていく。

(待って……！)

心はぽんつと窓から飛び降りて外に出ようとするが、夏彦は急いで部屋の中へと身体を引っ込める。

庭に面した横開きの網戸を開き、揃えて置かれたサンダルを足に引っかけて、夏彦は庭へ下りた。

「待って」

びくりと、背中が震えた。

振り返らずに遠ざかろうとした背中が、急に前のめりになる。

あつ、と思った時には遅かった。

庭に転がっていた小さな石につまづき、俯けに倒れてしまったのだ。

「だ、大丈夫？」

追いついてたためらいがちに声をかけると、地面に手をつきながら、ようやく振り向いてくれた。

さらりと長い黒髪が肩から滑り落ち、向けられた黒い瞳が印象的だった。

理知的な光を宿しながらも、ぱちりと瞬いた大きな瞳はあどけなく。

かわいいな、と素直に思った。

「立てる……?」

少女は逡巡するような間をおいてから、差し出された手をとって立ち上がる。

高校生、あるいは中学生だろうか。

背は夏彦よりかなり低い。淡い黄色のワンピースから伸びた手足は細く、肌は夏の陽ざしとは無縁そうで、雪のように白い。背中で結ばれた白いリボンが、そして腰まである黒髪が、夏風に攫われてふわふわと横に靡く。

「えっと、君は……」

「ごめんなさい!」

「え?」

いきなり謝られて、夏彦はどぎまぎする。

少女は恥じらうように続けた。

「その……勝手に庭に、入ってしまったって」

「あ、いいよ。そんな、気にしないで」

怒られると思っていたのだろうか。夏彦の言葉に、少女は強張っていた顔を少しだけ和らげた。

ほっとしたらしい表情に、夏彦の顔も自然と緩くなる。

「本当に、ごめんなさい」

少女は勢いよく頭を下げ、踵を返す。

背中のリボンが風にはためき、優雅に歩き去っていく。

「あ……待って!」

夏彦はほとんど無意識に呼び止めた。

少女が足を止め、くるりと振り返る。

「花を置いたの……君?」

少女の愛らしい黒い瞳が僅かに瞠られ、夏彦はやっぱり……と呟いた。

「何で……」

夏彦の問いに、少女は俯いたまま答えない。

「ごめん。言いたくないなら」

「……………たの」

「え？ ごめん、もう一回……」

少女の瞼がぴくんと震えた。覗く瞳が、気まずそうに斜めに逸らされる。

「じ、ごめん！」

少女の仕草に罪悪感を覚え、夏彦は捲し立てた。

「何て言うか……本当にごめん！」

無我夢中で謝り、最後の「ごめん」と同時に腰を九十度に折って、少女の言葉を待つ。

瞬き二つ分の間をおいてから、ふいに少女の笑い声が洩れ聞こえてきた。

(え……?)

夏彦がゆっくりと上半身を起こすと、肩を細かに揺らして笑う少女の姿があった。

クラスのどんな女の子たちとも違う、優しくて繊細な……触れたら消えてしまいそうな笑顔に見惚れていると、少女ははっとなり、恥ずかしそうに目を泳がせた。

暫く視線をさ迷わせ、言葉を押し出すようにして、切り出す。

「花は……頼まれたの」

「頼まれた？ 誰に？」

「……お姉さん」

「お姉さん？」

こくりと頷いた少女が、私の家、と指し示した先を見て、夏彦は目を丸くする。

「お隣さん？ 先月引っ越してきた？」

「 ええ。あの窓……あそこがお姉さんの部屋なの」

少女はすつと指を持ち上げて、白い家の二階を示した。

「何で、お姉さんは君に」

頼んだの、と言いかけて夏彦は不自然に言葉を切った。

「ご近所の諸事に疎い夏彦だが、つい最近聞いた話だから、はつきりと頭に残っていた。」

夕食の時、近所の人に聞いたと、母が何気なく話していて

「病気なの」

すつと落ちる声で告げ、少女は寂しそうに微笑んだ。

「心臓に先天性の疾患があるって言われて。ずっと病院にいたんだけど、この前やっと退院して。引越してきたのも、ここは静かで、お姉さんの療養にいいからって。それで、ベッドで寝てたら聴こえてきたって、お姉さんが……」

「聴こえてきた？」

「うん、ピアノの音。あなたが弾いていたのね」

ピアノの話になった途端、これまでのぎこちなさは薄らぎ、少女は表情を変えた。

「お姉さん、あなたのピアノをすごく気に入ったみたいで、毎日楽しみにしてるの。優しい曲だったり、激しい曲だったり、いろいろ楽しむそうに話す少女を見て、夏彦の鼓動がどくと跳ねる。」

「でも、この前いいところで間違えたでしょ？ だから、お姉さんすごく残念そうにしたの」

「あ、あれは……ちよつと指がもつれて……」

あからさまな言いわけに、少女はくすくすと笑う。

「お姉さんにも、そう伝えとくわね」

「え。伝えなくていいよ。むしろ伝えないで」

「どうしようかな」と、無邪気な駆け引きを楽しむように言われて、夏彦の凝こっていた心もほぐれていく。

少女は少しだけ目を伏せて言った。

「……最近、ピアノ聴こえてこなかったから、お姉さんベッドでふ

さぎこんじゃったの」

「そ、そうなんだ？ ごめん……」

「どうしてかなって、ちよっと心配してたの。でも、今日弾いてたから安心したわ」

お姉さんのことを話してるのに、まるで自分が聴いていたように話すんだな、と思ってるから気付く。

（ そっか。同じ家にいるんだから、この娘も俺のピアノ聴いてくれてたのか）

「お姉さん、あの曲が一番好きなの。ちゃん、ちゃん、ちゃん、って感じでゆっくりな……って、これじゃ分からないわよね」

夏彦は、ん〜と考え込み、ふと閃く。

「……もしかして、シヨパンの夜想曲？」

夏彦が試しに口ずさむと、

「そう、それだわ！」

少女は、うつとりとした顔で言う。

「あの曲を聴いてると、とっても心が落ち着くって、お姉さん言うてたわ」

「俺も好きだよ。いらいらした時に弾くと、心が落ち着くから」

「また弾いてくれる？」

「うん、いいよ」

夏彦が笑顔で応じると、少女も嬉しそうにした。

「ありがとう、お姉さん喜ぶわ。それでね」

その後、少女は《お姉さん》を通して、夏彦のピアノのことを楽しそうに話してくれた。

だから、ふと気になった。

（ この娘はどう思ってるんだろう？）

「花は、ピアノのお礼にって」

「え、お礼？」

「うん、素敵な曲を聴かせてくれたお礼にって、お姉さんから」

「あ、ありがとう……」

少女はくすりと笑う。

「私じゃなくて、お姉さんからだよ」

「あ、そっか、そうだね。でも、花、持ってきてくれたのは君だから」

素直な気持ちで言うと、少女は照れたように小さく零した。

「……………うん」

「お姉さんにも、お礼を伝えてくれる？」

少女は頷き、笑みを広げた。

「お姉さん、ぜったい喜ぶわ」

夕陽に照らされた笑顔が眩しい。けれど、オレンジ色の陽ざしのせいなのか、何処か物憂げに夏彦の目に映る。

(お姉さんの病気、重いのかな……………)

つきりと心を痛めながら、夏彦は逸らすようにして別のことを訊いた。

「あ、そうだ。名前、訊いていい？ 俺は佐々木夏彦。季節の夏に

……………ええと、彦は……………」

自分の名前の漢字をろくに説明できずに焦ったけれど、ちゃんと伝わったらしい。

「夏彦くん？ いい名前ね。お姉さんと同じで……………」

「え。君のお姉さん、夏彦っていうの？」

少女は一瞬きよんとし、それからくすくすと笑い出した。

「そんなわけないじゃない。お姉さん、夏の香りで夏香^{なつか}っていうのだから、同じ夏だなって思ったの」

「あ、ああ……………夏香ちゃん……………」

俺、アホすぎる……………と思いつながら、かわいい名前だね、と褒めた。すると、少女は自分のことのように嬉しそうな顔をした。

「ありがと。名前褒めてたって、お姉さんに伝えるね」

「うん、伝えて。それで、君は……………」

「私？ 私は……………冬香^{ふゆか}」

「トウカちゃん？」

「うん。冬の香りで冬香」

「冬香ちゃんか……」

夏彦がもう一度名前を口にすると、冬香は夕陽を見ながらぼつりと呟いた。

「私は仲間外れね」

「え、何で？」

「お姉さんも夏彦くんも、夏だから」

あっさりとした物言いに突き離れた気がして、夏彦は手繰り寄せるように言う。

「そんなことないよ」

「え？」

「仲間外れだなんて、そんなことない」

「私だけ冬なの？」

「冬だからだよ」

夏彦はさっぱりとした笑みで答える。

「冬も夏も、それから秋も春もみんな季節だろ？ 仲間外れどころか、兄弟じゃん」

冬香は息を呑んだように、夏彦を見つめ返した。それから、ほんのり頬を緩める。

「そうだね」

「そうだよ」

ふふ、と冬香は笑う。

「夏彦くんにかかれば、どんな哀しみも違うものになりそう」

「大袈裟だよ」

夏彦が目をまるまるとさせて言うと、冬香はもう一度笑った。夕陽の眩しさに目をすがめるようにして言う。

「そろそろ帰らないと」

茜色の陽ざしを吸った庭の草花が、名残惜しそうに葉ずれの音を響かせる。

もうちよっと一緒に ……

出かかった言葉を、夏彦は寸前で変えた。

「ピアノ、毎日弾くから」

「ありがとう、夏彦くん」

やんわりと目を細めた冬香に、夏彦は笑みを向ける。

ピアノを気に入ってくれた夏香ちゃん、夏香ちゃんの想いを届け
てくれた冬香ちゃん 二人に届くように、ピアノを弾こう。

哀愁の滲んだ夕空を見つめながら、夏彦は心の中でひそかに誓っ
た。

2・届けたい音

心地よく流れていた旋律が、またふつりと途切れる。

「頭で考えちゃだめよ。ちゃんと身体でリズムを刻まないと」

何小節か進む度に母の指摘が入っては途切れるから、あまり一つの曲を弾いている感じがしない。思うように弾けないはがゆさに、とくん、と心に熱がこもる。

早く、弾けるようになりたい。もっと、もっと、色んな曲を

……

指摘も助言もお小言も。ピアノに関わる全てのものが、冬香に出逢うまでは一緒だった。

何もかもが無意味で、ただ鬱々した想いだけが募っていった。

だけど

鍵盤を指先で叩きながら、母に言われたところを意識して弾いてみる。

(あ……)

最初に弾いた時よりも、ほんの少しやわらかい音が耳に届く。

でも、この音じゃない。この曲は、もっとこう

思い描いた音が奏でられない。届けたい音にならない。

何度目かの演奏で母の合格点をもらえたけれど、それでも心の中のもやもやは消えなかった。くすぶる想いを持って余しながらレッスンを終え、夏彦は窓辺に寄る。

期待したとおり、一輪の花が目に入り顔がほころんだ。

(今日はピンク……)

あれから、冬香は毎日夜を届けてくれた。

最初が黄色で、その次が紅、白、青　そしてピンク。

色を日替わりにしてくれるので、見るのが余計に楽しみになった。今日は何色だろう。どんな花だろう。

わくわくしながら窓辺に寄り、花を拾い上げ、夏彦はいつものよ

うに窓から顔を出す。

(……………いた)

白いワンピースに、大きな麦わら帽子をかぶった冬香が、夕陽色に照っている。

手を振ると、冬香も夏彦に気付き、微笑みを返してくれる。

夏彦は失くさないように、二階の部屋に花を置きに行き、階段を一気に駆け下りて庭へ出た。

「冬香ちゃん」

「夏彦くん」

息を切らす夏彦を見て、冬香は笑った。

「どうしたの、そんなにはあはあして」

「え？ うん、ちょっと、家を、マラソン」

国語の時間みたいに、文節に区切るような感じで答えると、冬香のくすくすとした笑い声が返ってくる。

「夏彦くんって見てて飽きないね」

「そう、かな……………」

少しでも早く逢いたいと思ったただけなのだけれど、この気持ちを素直に口にするのは、何だか気恥ずかしい。

「ねえ、冬香ちゃん」

「ん？」

小首を傾げた拍子に彼女の髪が流れて、黒い瞳が優しく見つめ返す。その瞳に吸い込まれそうになりながら、夏彦はぎくしゃくと告げた。

「花、ありがとう。ピンクの花ってかわいいね。……………お、男の俺が言うのも変だけど」

うっん、と冬香は微笑む。

「今日も素敵な曲だって、お姉さん言ってたわ」

「良かった……………喜んでくれたみたいで」

安堵の笑みを零すと、冬香も同じように微笑んでくれた。

曲と花の感想を交換するだけの関係を一步前進させたくて、夏彦

は訊いた。

「ねえ、冬香ちゃんは俺と同じくらい？」

「えっと……夏彦くんは？」

「俺は高二だよ」

もう少し自分を知ってもらいたい。でも何を付け加えたらいいのか分からなくて、気が付いたら心にたまっていたもやもやが、ぼろりと口を衝いて出た。

「来年になったら受験だよ。母さんには音大に行けって言われてるけど……」

「けど？ 行きたくないの？ どうして？」

たたみかけるように訊かれて、夏彦は言葉につまる。

冬香の言葉を頭の中で反芻し、答えにならない自問が零れた。

「何でだろう……」

自分の中に答えが用意されていないことに気付き、愕然とする。

沈黙を埋めてくれたのは冬香だった。

「それは……行きたい、行きたくない、どっちも違うってことじゃない？」

「え……？」

「分からないってことは、まだどっちでもないってことじゃないかな」

言われた瞬間、風が吹き抜けた気がした。心が吹き上げられ、空に浮かんでいるような心地になり、すとな……と腑に落ちた。

地に足がついていない不安定な感覚は、ピアノに向き合う自分だ。

どちらかに決めるほど、ピアノに向き合えていない自分

「つまり、どっちにもなれる、ってことよ」

汪洋とする夏彦に、冬香はすっきりとした笑みで付け加えた。

瞬く星もまだ見えないけれど、冬香の見せた笑みは、夜の月を思わせた。

そこにいるのに、遠くて……必死に手を伸ばす。

「俺は高二だけど、冬香ちゃんは？」

「私は……中三」

「中三？ あれ、今年受験？」

「……うん。あ、お姉さんは高一だよ」

「そうなんだ？ 一つ下だね」

笑んで答えながら、夏彦はうすうす感じていたことを確証に変えた。

何度逢っても、冬香は自分のことを進んで語ろうとしない。訊いても、すぐに《お姉さん》の話にすり替えてしまふ。

そして

「そろそろ帰らないと」

冬香はいつものように、別れを切り出した。

空に向かって真つすぐ伸びる向日葵が、冬香に寄り添うようにして揺れている。

茜色を濃くした空には、うつすらと月が浮かんでいた。

祖母がしていたように、もらった花は全部押し花にした。

かばんにつけられるように幾つかはキーホルダーに、残りはしおりにして、きれいなまま閉じ込める。

逢った日数分だけ増えていく押し花を眺めていると、ふいに囁かれる。

つまり、どっちにもなれる、ってことよ

すつきりとした、遠い笑みが一緒に浮かんだ。

その夜 夏彦は外灯のない街中を走り、ただひたすら月を追いかける夢を見た。

朝から雨が降り、夏の暑さを少しだけ遠ざけた夕方。

雨露が夕映えの庭をきらきらと彩り、止んだ雨の代わりに蝉の鳴き声が降り注ぐ。

「お姉さんは何が好きなの？」

「何って？」

「例えば、好きな映画とか食べものとか……趣味、とか」

冬香はうん、と視線を空に向けて考える素振りを見せる。

「好きな映画は、ピアノ・レッスン。食べものは……チョコレートケーキ。趣味は、夏彦くんのピアノ観賞、かな」

かな、のところで冬香は少しだけ首を傾いで笑った。

《お姉さん》の話をする冬香は、眩しいくらいに生き生きして見えた。新しい表情を発見する度に、夏彦の鼓動がドキドキと早鳴る。（何だろ、俺、何か変……）

冬香のことを気かけながらも、夏彦はしきりに《お姉さん》のことを訊いた。

楽しそうな冬香を見ると、優しく幸せな気持ちになって、あの映画は俺も見たいよ、ケーキは昔母さんが焼いてくれたっけ、俺のピアノが趣味って照れるな……と、ひとつひとつ丁寧に言葉を返していく。

そしてふと話題が途切れた時、冬香はさりげない調子で言った。

「お姉さん、心臓の病気だって話したよね」

「あ、うん」

短く答えた瞬間、言葉の重みが増したのを感じた。

身を固くした夏彦に、冬香はぼつぼつと話す。

「校庭の隅で、お姉さん、いつもぼつんとしてた。体育の授業なんて、出られなかったから。でも、学校通えただけ、良かったのかな。病院の……あの真っ白な部屋にいるお姉さんを見る度に、本当に病気になるんだな、って、思った」

「悪いんだ？」

「……うん」

たった一言が、ずんと心に重くのしかかる。

夕陽の朱色が昏く滲み、庭の草木と冬香と自分が、一つの絵画を構成するパーツのように思えてきて、何処か遠くにある意識がそれ

らを冷静に見つめる。

でもね、というか細い声が、夏彦の意識を引き戻した。

「手術すれば、治る可能性はあるの。でも、難しい手術なんだって、すくく……」

冬香は平坦な声で言った。

その乏しさの中に、深い感情が渦巻いているようだった。

「手術したら治るかもしれない。でも、失敗したら……。それでも、まわりは手術した方がいいって……。このままじゃいずれ、って……」

沈んでいく言葉の先にあるものに、夏彦の視界が揺らいだ。

冬香は、焦点を合わせるのに必死な夏彦の目を見て言う。

「手術……した方がいいのかな？」

どっちにもなれる、と言った時に見せた遠い表情が、重なって見えた。

冬香にとつて……《お姉さん》にとつて、《どっちにも》は単なる希望だけじゃないんだ。

ひどく冷静に理解して、壊れものに触れるように、手術、と夏彦は口にした。

「した方がいい、なんて言わない。言えない。でも……」

自分の抱えていた二択の軽さに、胸の奥が締め付けられる。

無責任かもしれない。それでも、自分の気持ちはちゃんと伝えたくて声にする。

「もし、少しでも助かる可能性があるなら……手術してほしいって、思う」

朱色の光を包み込んだ分厚い雲も、風をはらんだ草木も、何もかもが止まって見えた。

ぼたりと垂れる雨露の音も、蝉の鳴き声も、大きな音も小さな音も遠ざかっていく中、冬香の声だけは聞き逃さなかった。

冬香は微かな笑みを覗かせ、小さく……うん、と呟いた。

それから暫く会話のないまま庭を歩き、一番大きな木の下で蝉の

鳴き声を聞いた。

赤い残照に、ああ、また帰っちゃうんだ……といつもと変わらな
い別れを予感していた時だった。

「……っ」

冬香の唇から苦しげな吐息が洩れ、袖なしのワンピースの肩口か
ら伸びた腕が、手が、胸の辺りを掴むように押さえて、その場にく
ずおれた。

「冬香ちゃん!？」

突然のことに夏彦は叫び、うづくまる冬香の横に屈み込んだ。

「どうしたの、大丈夫!？」

そして、顔色が尋常ではないと悟ってすぐに立ち上がった。

救急車、と駆け出そうとする足を掴まれて、夏彦は振り返る。

「大丈夫……ちよつと、貧血になっただけだから……」

「でも」

「平気。たまに、あるの……この感じなら、大丈夫……」

そう言いながらも、冬香ははあはあと荒い呼吸を繰り返している。
しかし、慌てた様子はなく、本当に慣れているという風に見えた。

暫くすると呼吸が徐々に落ち着いてきて、顔色もゆっくりと戻る。

「本当に大丈夫?」

「うん、大丈夫……ただの貧血だから。今日はもう帰るね」

何事もなかったかのように笑みを浮かべる冬香を、夏彦は家の前
まで送った。

とぼとぼと来た道を引き返していると、さざ波のように動悸が押
し寄せてくる。

苦しげに歪んだ冬香の顔が、脳裏に焼き付いて離れなかった。

3・冬香と夏彦

平日は父の帰りが遅いので、母と二人だけで夕食をとることが多い。

四人がけのテーブルに向かい合って座り、いただきます、と言って食事を始める。

クラシック音楽が静かに食卓を流れている。

これは、シヨパンのピアノソナタだ。

「ねえ、母さん……」

切々と奏でられる音色が、夏彦の緊張した声によって裂かれる。

「なあに、夏彦」

ミネストローネを口に運んでいた手を止め、母が不思議そうに夏彦を見る。

「隣に、女の子いるよね。あの、白い家の方……だけど」

「佐久間さんのところね。お嬢さんが一人いるけど……」

それがどうしたの、と続いた声は耳に入らなかった。

「一人……?」

ほとんど夢見心地で訊いた夏彦に、母は答える。

「ええ。夏香ちゃん、だったかしら。心臓が悪いみたいね」

かわいそうに、と遅れて付け加えられた言葉が、やけに無慈悲に響いた。

大丈夫、と言いながらも、胸を押さえて苦しそうにしていた冬香。あの苦しげな顔を見た瞬間に宿った疑念が、急速に現実味を帯びていく。

「もう一人いるよね? 冬香ちゃん、長い黒髪の子」

平静を装ったつもりが、思いのほか問い詰めるような口調になってしまい、母は少しだけ眉を上げて面食らった顔をする。

「いないわよ。佐久間さんのところは、お嬢さん一人の筈よ。そのお嬢さんがどうかしたの?」

「え……あ、何でもないよ。何でも……」
夏彦は止まっていた手を動かし、目の前のパスタをのろのろと口に運ぶ。

麻痺した舌は、料理の温度を感じるのに手一杯で、何の味も伝えはくれなかった。

「もう大丈夫なの？ 本当に？」

矢継ぎ早に訊く夏彦に、冬香は苦笑する。

「大丈夫よ。心配いらなんて、昨日も言ったでしょ？」

昨日の夕方から蓄積されていた不安が、冬香に逢ったことで存在を主張し始める。

今日届けてくれた花のこと、ピアノやたわいもない日常の話。

今ここにある平穏な空気を壊したくなくて、時間だけが刻々と過ぎていく。

「冬香ちゃん」

空の茜色が大分濃くなった頃、夏彦は会話と会話の間に滑り込ませるようにして、名を呼んだ。

「なに？」

冬香がぱちぱちと目を瞬いて、屈託のない笑みをくれる。

「冬香ちゃんは」

鼓動が味わったことのないほど、激しく打たれた。

「夏香ちゃんなの？」

冬香の表情がすうつと消える。

「どう……して？」

「違っって、言わないんだね」

責めるつもりはなくて、優しい微笑を添えて言うと、冬香はびくりと肩を震わせた。

視線を揺らし、逡巡する間があって、横向き加減になった頬に茜色の影が落ちる。

「やっぱり、そうなんだね」

「ごめ……なさい……」

夕陽に輪郭を溶かしながら、冬香は小さく掠れた声を洩らした。

「嘘つくつもりは……なかったの。でも……」

声だけではなく手まで震えているのに気付いて、夏彦は考える間もなく、その手をとっていた。

「冬……夏香ちゃん」

出逢った時と変わらない、きれいな黒い瞳が夏彦を見つめ返す。

夏彦ははっと我に返った。

「……ごめんっ！」

小さな手だった。

慌てて手を離して、安心させたい一心で想いを言葉に変える。

「責めてるわけじゃないんだ。本当に、ただ、理由が知りたいたけなんだ」

夏彦の必死な表情の中に、非難の色は微塵もないのを見てとったのか、夏香は強張った顔を少しだけ緩めた。

夏彦に触れられた手に視線を落とし、俯き加減に、あの日……と零した。

「花を置きに行ったら、夏彦くんが急に庭に出てきて、だから……咄嗟に頼まれたって言っちゃったの。それで、お姉さんに頼まれたって……嘘ついて。でも、次の日、本当は言おうと思ったの。私は冬香じゃなくて夏香だって。でも、でもね……」

顔を上げた夏香を見て、夏彦ははっとなる。

夏香は泣いていた。

「冬香になったら、自分でも驚くくらい、楽になったの。病気の自分を切り離して、何も知らない夏彦くんと話するのが、本当に楽しくて。嬉しくて。夏彦くんが冬香って呼ばれるうちに、私は、本当に冬香なんじゃないかって。病気なのは私じゃなくて、お姉さんの夏香だって……思い込もうとして。だから……次の日も、その次の日も言い出せなくて」

夏香はそこで、諦めたように笑った。

「だけど、冬香はやっぱり、本当の私じゃ……ないんだよね」
ぼろぼろと、夏香の瞳から溢れた涙が、頬を滑り落ちていく。

「夏香ちゃん……」
さつき手を離してしまったことを、夏彦は心の底から後悔した。
夏香の頼りない手を今度はしっかりと掴み、涙を隠すようにして、自分よりも小さな身体を引き寄せる。

「夏……彦くん……？」
やわらかい額が胸に当たり、夏香の声がすぐ側で聞こえた。

「ありがとう、夏香ちゃん。話してくれて　ありがとう」
自分でも随分と大胆なことをしているとと思った。けれど、今は泣いている夏香を抱き締めたいという想いに駆られ、身体がその想いに従ってしまった。

夏香の長い黒髪が腕をくすぐる。こんなことをして、嫌われてしまわないだろうか、余計に傷を広げてしまわないだろうかと不安になるが、夏香は大人しく夏彦の胸の鼓動に身を寄せながら、声を押し殺すようにして泣いていた。

夏香ちゃん、と優しく呼び、震える背中をおそるおそる撫でる。
そのうちに、少しずつ嗚咽の間隔が長くなり、落ち着きを取り戻していく。

夏香はゆっくりと身体を離れた。

お互いの顔が確認できるほど離れると、

「ごめんなさい」

「ごめんっ」

二人の声が重なった。

顔を見合わせた二人は、ぱちと瞬いて、ほんの少しだけ……控え目に笑う。

忙しない蝉の鳴き声が、夢から醒めたかのように辺りに満ちていき、今の今まで、目の前にいる夏香のことしか感じていなかったのだと、夏彦は今更ながら気が付いた。

(そっだ……)

そして、思い出したようにズボンのポケットに手を入れ、おもむろに引き抜いた拳を夏香の目の高さまで持ち上げて、ぱっと開く。しゅらんと、夏彦の手の中から下がったものを見て、

「それ……」

夏香は吐息のような声を洩らした。

陽の光を照り返して揺れる、二対の押し花のキーホルダー。

小さな手の平の上にそっと降ろしてあげると、夏香は、銀色のチエーンの先にある丸い輪っかに指を引っかけて、透けて見える二つの花を夕空に近付けた。

緩やかな楕円を描いた透明な板が光を弾いて、中の花まで輝いて見える。

「夏香ちゃんと……冬香ちゃんに、花のお礼だよ」

「え……？」

「あ、もらったのでお礼っていうのも、変かもしれないけど」

「そうじゃ、なくて……」

戸惑う夏香に、夏彦は少しだけ声のトーンを変えて言った。

「……ほんとは、昨日渡そうと思ってたんだ。夏香ちゃんと、冬香ちゃんにとって」

「あ、だから……二つ……？」

「うん……。冬香ちゃんが本当は夏香ちゃんだって気付いたから、渡すのは一つにしようと思ったんだけど、やっぱり……二つ渡したって思ったんだ」

静かに想いの内を告白した夏彦に、夏香は不思議そうに尋ね返した。

「どうして……？」

「俺のピアノを好きって言うてくれた夏香ちゃん、夏香ちゃんのことをいっぱい話してくれた冬香ちゃん、どっちが欠けても、今目の前にいる夏香ちゃんじゃないって、思うから」

笑みを浮かべて言うつと、夏香の瞳から何の前触れもなくぽろっとまた涙が零れてきて、夏彦は焦った。

夏香も、あ、あれ？　と言いながら、「ごしごしと手の甲で涙をよける。

「泣いてるんじゃないの、嬉しくて、それで……」

すん、と鼻を鳴らして、夏香は手の中のキーホルダーを見つめた。

「それに……」

涙を拭った筈の瞳が、じわりとまた潤んだ。

「花は……いずれは捨てられちゃうって、思ってたから……」

心に沁み入る声で言われ、夏彦は懐かしむように言う。

「俺のおばあちゃんがね……」

「おばあちゃん？」

「うん。……昔、こつやってよく押し花にしてたんだ。遊びに行く

度に見せてくれて」

ゆつたりと漂うような口調で話すと、夏香は、そう……と小さく

呟いて、僅かに睫毛を伏せる。

夏彦は沈黙をつくらないように、つとめて明るく、思い出を語った。

「何で押し花にするのって訊いたら、おばあちゃん、何て答えたと思っ？」

「何で答えたの？」

「時間を止める魔法だよ、って」

「魔法……？」

「魔法……？」

きよとんとする夏香に、夏彦は微笑んだ。

「おばあちゃんが押し花をつくるようになったのは、おじいちゃん
がきっかけだったんだ」

幼い頃に見た懐かしい眼差しが、瞼の裏に浮かぶ。

「おじいちゃんは……ロマンチックって言葉が似合わない厳格な人
だったけど、おばあちゃんの誕生日に、一度だけ花束を贈ったこと
があったんだ。おばあちゃん、すごく感激して、枯れちゃう前に、
それを押し花にしたって母さんが言ってた」

軒先の風鈴がチリンと鳴って、この庭よりもたくさん蝉が鳴いていて 祖母との思い出を振り返って真っ先に思い出すのは、決まってるあの夏の日の光景だ。

居間の丸い卓について、祖母は小さなレンズの眼鏡をかけて、目をしょぼしょぼさせながら、静かに本を読んでいた。開いた本の横には、いつも同じ押し花のしおりが置かれていて、それを見た祖父がどうしてか、不機嫌そうにしていた。

子供心に、眉間に深いしわを刻んだ祖父が怒っているように見えるのに、少し違うようにも見えて、とても不思議だった。

だから、どんな光景よりもあの夏のコマが、今でも鮮明に印象に残っているのかもしれない

「そうなんだ……」

夏香はしんみりと言って、手の中のキーホルダーを、つんと指先で転がした。

「この花には、夏彦くんとおばあちゃんの思い出が、つまってるんだね……」

小さな手の上で寄り添う二つのキーホルダーを、夏彦も静かに見つめる。

ちらちらと窓辺で揺れていた花を重ね見て、夏彦は口元をほころばせた。

「夏香ちゃんとのことも、だよ」

視線を上げて見返してきた瞳に、夏彦は微笑みかける。

「夏香ちゃんが俺のピアノを好きだって言ってくれたことも、冬香ちゃんがそれを伝えるに来てくれたことも、この花はちゃんと憶えているよ」

てらいのない笑みを向けると、夏香は俯いて、愛しげに手の中のキーホルダーを撫でた。

「花は枯れちゃうから、折り紙に変えようかとも、途中で思ったんだけど……」

「折り紙？」

そう、と夏香は力強く頷いた。

「コスモスとか、チュリーツプとか。本に載ってるの、全部折れるのよ。すごいでしょ？」

寂しげに言う夏香の後ろに、白い部屋がぼんやりと浮かんだ。

窓際に置かれたベッドの上で、夏香がひとりで折り紙を折っている。

「すごいね、俺は不器用だから……鶴もまともに折れないよ」

「ピアノ、あんなに上手く弾けるの？」

「上手くないよ！ まだまだ、全然だめ」

全力で否定した夏彦に、夏香は、そっか……と呟いて、

「精進だね」

と、にっこり笑う。

「そうだね、精進するよ」

少し前までは、あんなに嫌いだと思っていたピアノを、今では上手になりたいと思っている。ピアノが聴くものだど気付かせてくれたのは、今日の前にいる夏香だ。

「ありがとう、夏香ちゃん」

あふれる想いを、夏彦は心からの笑みに変えた。

「どうしたの？ 急に改まって……」

夏香はどきまぎとし、ほんのり頬を赤らめて俯いてしまう。

「ううん、それより……何で折り紙にしなかったの？ 枯れるって、思ったのに」

「枯れるって、思ったからよ」

夏香の凜とした声が、夏彦の心にかたく響いた。

「折り紙だと、ずっと残っちゃうでしょ？ 夏彦くんは優しいから、きつと捨てないで持っていてくれるって、思ったの。私が……もし、いなくなっても」

花びらを閉じた朝顔を見つめながら、夏香は静かに言った。

「でも……折り紙と違って、花はいつかは枯れて、捨てられちゃう」

下ろした手の平を持ち上げて、夏香はもう一度ゆっくりと開いた。「何も残らないって思ったから、私の気持ちをこめられたのに……」
無くなってしまうと思っていた花が、変わらず手の中にあるのを見て、切な気に目を細める。

（夏香ちゃんは、先のない未来を受け入れてるんだ）

漠然と悟った瞬間、夏彦は締めつけられるような痛みにも胸を押さえて、声を絞り出した。

「捨てないよ……かさかさに乾いてぼろぼろになっても、俺は絶対に捨てない。夏香ちゃんの想いを捨てるなんて、そんなこと……」

唇を噛み締めた夏彦を、夏香は涙に濡れた瞳で見返した。

泣き笑いを浮かべながら、

「ほんとに、魔法……だね」

「え？」

「夏彦くんと……今こうして話してることも、この花は憶えていてくれるんだよね……」

存在を確かめたくて、夏香はぎゅっと握り締めた。

「もっと、増やせるかな……」

キーホルダーを握り締める夏香の手を、夏彦は手を添えて包み込んだ。

確証のない言葉なんて、夏香はきつと望んでない。だから、胸に宿る気持ちを、夏彦はありのまま伝えた。

「俺は、夏香ちゃんともっともつと一緒にいたいって、思ってる」

「夏彦くん……」

今の夏彦に言える精一杯の気持ちを伝えると、夏香は夏彦の胸にとんと額を寄せた。

夏彦の鼓動が、夏香の耳に確かに届いた。

「ありがとう、夏彦くん」

いつも遠くに感じていた夏香が、その時、自分から歩み寄ってくれた気がした。

夏彦も距離を縮めたくて、少しでも、不安を取り除きたい一心で

「……ありがとう、は俺の方だよ」

しっかりと、夏香の身体を抱き締める。

夏香の肩越しに見えた夕空は、今までに見たどんな空よりもきれいで、透き通っていた。

4・夏の旋律

白い塀に挟まれた立派な正門を抜け、大学の広い構内へと足を踏み入れた夏彦は、ふと足を止めた。

ついこの間まで聞こえていた鶯うぐいすの鳴き声が、いつのまにか聞こえなくなっていることに気が付いた。

(いつからだろう……)

ベンチ脇の緑を茂らせた大きな木を見上げ、季節が巡るのは本当に早いな、と夏彦は思う。

学生課のある事務棟の入り口に、横開きのガラス戸に覆われた掲示板がある。

学部ごとに区切られた掲示板の前では、休講の確認を終えた生徒が、がっかりしたり、晴れやかな顔をしたり、携帯で連絡を取り合ったりしている。

貼り出しを確認する為に、夏彦もその中に加わった。

「おい、佐々木」

「ん……？」

掲示板を見て、午後の講義が休講になっていることを知ったところで、夏彦は聞き覚えのある声に呼ばれて振り返った。

「なんだ、吉田か……」

同じピアノ科の一年生で、気さくでいいやつなのだけれど、一つだけ困った点がある。

にこにこ何か言いたげな顔を見て、夏彦は大仰に溜息をついた。

「……どうせ、また合コンの誘いだろ？」

案の定、吉田はにかつと歯を見せて笑った。

「冴えてるね。なんと、今度のお相手は」

「……パス」

うんざりした声で言うと、吉田はあからさまに残念そうな顔をし、夏彦を非難した。

「お前、コレだけは本当に付き合い悪いな。一度も出たことないだろ？ そんなんじゃ、恋の一つも出来ないぞ」

「……いいよ」

「いいって、お前」

「待ってる人、いるから」

「ぼそつと言って、夏彦は掲示板の前を離れる。」

「うそ？ ちよつ、待てよ。詳しく聞かせろつて」

興味津々な声を上げた吉田をおいて、夏彦は講義棟へ向かってさつさと歩き出した。

爽やかな初夏の風に乗って、庭に咲く草花の香りが、ふんわりと運ばれてくる。

部屋を満たすのは、夏の訪れを告げる湿った草花の香りと やわらかなピアノの音色。

午後の講義が休講になったせいで、夏彦はいつもより早く帰宅し、午前中の個人レッスンで指摘された箇所を克服しようと、ピアノに向かっていた。

苦手を克服すれば、きつと

夏彦は一心にピアノを弾き続けた。

そして、課題曲を自分の中では幾分か満足に弾けるようになった後、夏彦は曲目を変え、自身の想いを乗せた音を奏で始めた。

夜想曲第2番変ホ長調作品9 2……シヨパンの夜想曲。ノクターン

左手でゆったりとした単調なリズムを刻み、右手で優雅な主旋律を奏でる。

澄んだ音色が光の粒となって部屋に散らばり、全てが輝き出す。彼女のことを思い浮かべる度に、いつも優しく流れるような想いと、切なさが心にあふれる。

演奏を終えて音が消えても、夏彦は鍵盤から指を離すことが出来

なかった。

はあ……と溜息をついて、漸く指を離した夏彦は、何気なく窓を見やる。

ピアノを弾き終えた後に窓の方を見てしまうのは、もつずっと前から日課になっている。

期待したものは何も見つけられずに、いつも肩を落とすだけなのだけれど

(え……?)

夏彦は、思わず息を呑んだ。

ちらちらと、窓辺で何かが揺れている。

考えるより先に夏彦は立ち上がり、床を蹴っていた。

窓までは僅かな距離しかないのに、辿りついた時には、まるで長い距離を走ったかのように息が切れていた。

見下ろし、目にしたものに、夏彦は大きく目を見開く。

黄色い花びらを付けた小さな花が、風に吹かれるまま静かに身を揺らしている。

風をまとってはためく薄いカーテンを手で払い、夏彦は窓の外へ身を乗り出した

【終】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2347y/>

【短編】夏色の調べ

2011年11月5日04時07分発行